「多元的古代」研究会・関東

多元 第6号
1995.4.6

TAGEN

発行人◎高田かつ子　編集人◎青山富士夫　事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方　TEL 044-522-4185

六月四日、定期大会に向かって

発足一年を顧みる

会長　高田かつ子

昨年五月二十二日、新しく独立した私たちの会もまもなく満一年を迎えようとしています。この一年間、会の中心になってきた高田かつ子会長にその間の苦心のほどと、次年度への抱負を語ってもらいました。なお一周年目の大会は六月四日に予定しています。（2ページ参照）

「多元的古代」研究会・関東が発足して一年たちました。大和朝廷一元史観を奉ずる人たちとも仲良く、と口で言いながら、その実は多元史観への反対に傾斜を強めようとする旧市民の古代理事会に同調するわけにはいかず、私たちは独立しました。独立までは、反発と否定のエネルギーが働きました。しかしいざ、独立してみると、今度は建設と寛容の姿勢が大切でした。

古田史学の継承と発展と言うのは簡単ですが、具体的に何をしたら良いのか。もとより、多元史観をよく把握された方々が頼みでしたが、そのほかにも、旧来の古代史に疑問を感じながらも、多元史観にはまだなじみの薄い方もあります。そういう方々とも、心を開いて語り合えるような会の性格でなければ、「古田史学の継承と発展」と言っても言葉だけのことになってしまいます。試行錯誤の討論を続けた挙句「基本原則は厳しく、運営はおおらかに」というようなところに、世話人一同の意見がまとまりました。

発足するや、まず会報を発行するという大仕事に取り組まなければなりませんでしたが、上述のような私たちの方針は、その後の会報の紙面を通じても、皆様におおよそ理解していただけたように思っています。古田先生の、熱のこもったご支援をいただけたことも、何よりも勇気づけられたことでした。

……とは言え、会報にはもっともっと、皆様のご意見を反映させたいものと思っています。会員の方々も、遠慮がちと申しましょうか、少し遠巻きにして形勢を観望しておられるような気配も感じます。いっそう積極的にご意見、情報を寄せられるよう、希望いたしております。

郵便料金には頭を抱えています。八〇円、九〇円、さらに五〇グラム以上は一挙に一九〇円に飛躍するのです。何たる非常識、と郵政省に悪態をつきながらも、発送の業務は、毎回有志が集まって楽しんでやっています。どなたか、ご参加下さいませんか。

「会員の発表と懇談の会」「万葉集と漢文を読む会」「山田宗睦日本書紀講座」などの定例会も、それぞれに充実感をもって軌道に乗っています。大きなイベントとしては、やはり二回の古田武彦講演会、夏の中小路駿逸講演会、そして秋の「古田先生と行く縄文長野の旅」の催しでした。大勢のご参加を得た上に、その機会ごとに新たにご入会下さる方が多数あったことも頼もしい限りでした。これらの催しは次年度も引き続き行って参ります。

これらの催しにも参加する機会のない、より広範な方々のために、ただ今、友好団体が協力して、研究誌を発行する計画が進んでいます。「多元的古代」研究会・九州、「多元

震災に古代学を思う

中小路駿逸

震度七。激震だった。

亀裂が大地を走り、ビルが傾き、八年前に住んでいた宿舎もボロボロに破壊された。その阪急宝塚線の沿線から、ほんの二キロほど登った傾斜地の住宅街では、家財道具が墜落・散乱した程度で、死傷者もなく、私の家も書架の半分ほどが傾いて書籍・雑誌が落ち積もった程度（茨木市にある大学の研究室も同様）だったが、整理を始めると全体の配列の総入れ替えみたいな状態になって、まだ全部は終わらない。少しずつ整理をつづけながら古代学のことを考えている。

動くとは想定しなかったものが動いた。当然、これに対処する手は事前に打たれていなかった。――地震の直後から今日までの、多くの報道や評論の根底にある「事実の核心」はこれだ。この種の事態は、今までに何度も起こっている。古代学の領域でも、すでに。

「近畿大和なる天皇家の王権は、七世紀よりも前から、日本列島内で卓越して尊貴な唯一の中心的権力であった。」――この「動くとは想定されなかった通念」が、動いた。もっと正確に言うと、学理の上で無効になった。この通念は論証を経たものではなく――つまり、証拠と理とによって疑いを排除して打ち立てられた学説といったものではなく――、「史料の真憑性高き箇所にはそれとは違うことがもともと書かれていた。」という挙証・論証が、すでに古田武彦氏によって二十余年前から続けられている。この古田指摘が正しいという裏づけを、私も十数年前から提示し続けている。近畿大和なる天皇家の王権自身が、みずからの過去について、「わが王権は、持統期末までは九州なる神代（天孫降臨）以来の王権の一分派格の権力であり、次代の文武期の初めから、列島唯一の天子の格になったのだ」と『日本書紀』と『続日本紀』とで、ちゃんと宣言しているのだ。『日本書紀』で、王なる皇孫の子孫である神武が初代王としるされ（王の子孫が初代王なのは分流の一王権の証拠）、文武即位後の宣命にはじめて「わが王権は（神武以来ではなくて）高天原以来（つまり天孫降臨以来）のもの」と宣言されるという形で。大和の王権にとって本家筋にあたる王権が九州に存続していたことは、明白かつ確実に、遅くとも八世紀中には記されているのである。文武宣命は六九七年発布、『日本書紀』は七二〇年奏上、『続日本紀』は七九七年撰進だから、原史料の成立を考えると、七世紀末から八世紀初期にかけての間、つまり「変化」の直後に、この「当事者による抜き差しならぬ告白」がなされているのだ。中国（唐）ではこの変化に対応する表現は七五四年に王維が阿倍仲麻呂に贈った詩の中に現われるが、『日本書紀』の宣言はそれより早く、文武宣命はさらに早い。必要にして十分な裏づけではあるまいか。

これに対して通念にとらわれている人々からは、素知らぬ顔で通念に立つ言説をなしたり、史料からあちらの一句やこちらの一節をとりあげ、今からでも通念の正しさを立証できるかのように言いなすといった（文武即位以後に成立した史料には通念に合うような文辞も含まれていて当然であり、通念に反する証言が含まれているという事実こそ大事な↘

的古代」研究会・関西、「多元的古代」研究会・関東、古田武彦と古代史を研究する会、古田史学の会（及その各支部）、青森市民古代史の会などです。これらの友好団体は、大局的に共通の目標を掲げながらも、当面はそれぞれの個性の上に立った実力をつけることに努力しています。いずれは全国的に連合した運動に発展することを念願としていますが、今回の研究誌の共同発行が、その第一歩の試金石となるように願っています。その研究誌の題名、内容などは、近々に皆様にお知らせできる手順です。

どうぞ、次の年度も、皆様のいっそう積極的なご支援をいただけますよう、お願い申し上げます。

（一九九五年三月三十一日）

定期大会と古田武彦講演会

発足一周年を迎えて「多元的古代」研究会・関東の定期大会を次のスケジュールで開くことに決まりました。

▼6月4日（日）11時～12時／大会
▼1時～5時／古田武彦氏講演会（12時半受付開始）
▼6時～8時／古田氏を囲む懇談会

会場は近日に決定しますので五月のはがき通信でお知らせします。

のに)、姑息にして高邁ならざる反応しか起こっていない。通念の本来の根拠(当然、古田論証出現以前に論証の根拠として使用されたと証明できるものでなければならない)については、宣命の文辞の誤解もしくは曲解が一因(別の一因は国生み説話にある)かと、すでに私は推定している。これに対しての反論も手続き上必要なのに、知らぬ顔をしてである。私にはこれらの反応が、震度七の地震を想定しなかった以上の貧困にして不自由な発想の産物と感じられる。さらに言うなら、まるで「兵庫県南部地震とか阪神・淡路大震災とかは、なかったのだ」と聞かされているような感じさえするのである。

震災でも、学理の面での通念の崩壊でも同じこと。日本古代史にかかわる人々の大多数が、「まず事実を正確に、率直に受け入れる」という正気の行動をとる日の近からんことを望む。

古田先生と和田家文書を読む会

「和田家文書を読む会」が始まりました。

……ここにある和田長三郎吉次の文章も大事ですね。(東日流外三郡誌総結篇二序言=北方新社版30ページ)「本書をうのみに史実の飼とすべからず、外三郡誌は諸説不漏に綴りたる歴書なりせば、是を究明の要あり。亦隠説の深蔵せる文献出づるやも神ならぬ私奴の思考届かざるところなり。依て東日流外三郡誌は古人の口説をも記したるに依て究処迷に堕ゆる多し。諸人能く是を探察し諸史料あはせて実史の完結あらば亦幸なり。」と、吉次は私の知らない隠れた説もあるかもしれない、諸人能くこれを探察して、諸史料合わせて実史を完結してもらいたいと言っている。ただ写すだけでなく、新しい知識を加えてくれと言っている。それがこの資料の重要なテーマなんです……

そういう雰囲気で古田先生の講話が進みます。その他和田家文書研究の注意点を以下に挙げられた。

一、寛政原本。寛政年間だけでなく、その後の時代を含む。正本は焼失し副本が伝わっている。被災以後孝季晩年のものは正本の可能性がある。

一、明治写本。慶応から昭和までの写本を含む。

A　読み下し本である。漢文から読み下しの過程で誤読、誤字の可能性がある。

B　追加記入本である。筆写時の知識が混入している場合がある。

C　権七、末吉、長作の筆跡がある。

今のところ、書写下限は昭和七年まで判っている。

一、活字本。類別編集がほどこされている。即ち原写本を一度解体して配列し直している。

その他、テキストに当面するに際しての、基本的な諸注意が述べられました。

次回は、▼4月21日(金)6時〜

▼場所　文京区民センター

参加希望者は、高田会長あてお申し込みください。(富永長三・記)

中村幸雄氏を悼む

古田史学の会全国世話人の中村幸雄さんが三月十七日急逝されました。六十九歳でした。中村さんは長年多元史観の発展に連なる新しい課題を次々と提起されました。当会として深く哀悼の意を表します。古田武彦氏から、次のような弔文が寄せられました。

弔文

古田　武彦

関東の地より故中村幸雄さんの御霊に向い、深く哀悼の意を捧げます。

貴方の御人柄は常に太洋のように悠然とし、その探究心は鋭い槍のように、対象の焦点を突き通す勢をもっていました。最初は、貴方の質問は問題の周辺を右や左へとさすらう趣がありましたけれども、やがてわたしの思い及ばなかった地点を次々と探りあて、歴史学上の重要課題を俎上にのぼらせてゆかれました。わたしにはその研究姿勢ととりあげた課題の深さに脱帽することが多くなってゆきました。まさに敬愛すべき探究の同志でした。七〜八世紀研究史は貴名を忘れえません。

しかも、かっての市民の古代研究会から幾多の「学問の大道からの脱落者」が出たとき、貴方は敢然として近畿天皇家一元主義批判の立場にたち、「古田史学の会」の世話役となられました。大局の正道を見失わず、悠々真実を守る、貴方の面目躍如の人生でした。

わたし達の道をいつもお見守りください。

三内丸山遺跡の空間利用論

秋田　フサ

1 土器の量

三内丸山遺跡の土器の出度量は94年度までに10Kg入りの段ボールで4万箱に近い。まだ発掘されていない埋蔵量は丸山遺跡全体で30～40万箱になるだろうと予測されています。江戸時代からの採取量、近現代の盗掘、工事による破壊、さらには作った土器すべてが残存しているわけではないこと、交易による流出（この遺跡の場合交易があったとすれば流出の量も相当なものだったと思う）等を考えると少なく見積もっても百万箱を超えるでしょう。土器の大小を平均して一箱から5点の土器を得るとして全体では5百万点、これを千年にわたって作りつづけていたとすれば1年に5千点、隔月に作るとすれば1万点を作ることになります。

これら大量の土器が捨てられたような状態で出土するのですが、なぜそこに捨てたか説明がついていません。無作為に捨てていたわけではなく一定の法則があります。前中期異物廃棄ブロックと呼ばれる谷の部分、盛土遺構と呼ばれる部分、埋設土器群といった所に集中して捨てられており、現代のように無差別にポイ捨てされたわけでは無かったようです。他の遺跡では台地の斜面部、集落の外縁部等から出土するという一定のパターンが見られます。このうち埋設土器群は子供用の墓とみなされて、他はほとんどゴミ捨て場あるいは土器の投棄場所と説明されています。土器の捨てられ方は前期においては比較的個体のまとまりがあり、廃棄された時は完全型ないしは一部破損型と思われ、土器焼成の時の失敗作とみられます。中期とくに中期後半は破砕されたかあるいは小破片で狭い範囲に密集した形であたかも敷き詰めたように廃棄されています。

2 土器の製作

丸山遺跡においては粘土採掘穴は見つかったものの、どこで焼いたのかわからないとされています。常識的に考えて粘土の採取が遠くても近くてもそれを自分の集落に持ってきて粘土を捏ね形を作り乾燥させ焼きあげるはずです。一番近くになければならない作業場や焼場が見つからないのはおかしな話です。土器の製作は最初に粘土の採取から始まります。粘土の採取穴は現在は野球場スタンドの下になってしまいましたが、同じ集落内にあります。その次に採取した粘土に砂や水等を混ぜて時間をかけて粘土がよくしまるように捏ねあわせます。捏ねあわせがよくなければ焼くときに割れてしまいます。次に捏ねたものを何日か寝かせます。次に形を作ります。底を作り粘土で紐状の輪を作りそれを積み重ねていきます。その後さらに粘土がよくしまるように木片や縄を押し付け、ろくろ状のもので回転させながら紋様を付けます。ろくろは発見されていませんが、実際に土器の製作を再現してみますと、円筒土器のような大型のものはろくろで製作されたと考える方が合理的です。少なくとも土器の底に藁座布団のようなものを敷いて回すくらいのことはしたでしょう。これらの作業はかならずしも共同作業でなくてもよいわけですが、居住用の住宅の広さや作業効率から推定して共同作業場があったはずです。

その次の作業は乾燥です。それに相当期間の月日の乾燥を要しますからそのために陰干しをする建物が必要です。何回にも分けて作ったにしても、仮に五千個を5回に分けて作ったにしても一度に千個保存する場所が必要です。最後の作業は野焼きです。土器の多さから考えて何メートル四方といった場所ではなく数十メートル程度の広さは考えるべきでしょう。それに帯状に火を付けたか、または何か所にも分けて火が付けられたことでしょう。時にはその他の行為つまり祭りなどを考えるともっと広かったと思われます。また野焼きの際は土器の底が焼けにくく、火の回りがほどよく土器に行き渡らないのです。現在野焼きをしている人はレンガを下に敷いてこれを解決していますが、縄文人はどのように解決していたでしょうか。

3 盛土遺構の特徴

寺野東遺跡で見つかった盛土が環状を呈していたことから環状盛土遺構と呼ばれています。丸山遺跡では広場とみなされるような空間となっています。縄文時代中期の5千年前から4千年前の約千年に渡って作られました。年平均3ミリメートルの厚さで造成されその中に無数の土器が見つかります。年代の古い下の層からは比較的破壊されない土器が見つかり、年代の新しい上の層からは土器が小破片となって見つかりま

す。中期堀立柱建物群を挟むように南北に二か所あり、その間や側に住居跡があります。規模は南北約70メートル、東西約60メートル、厚さは最大の所で約2.8メートルです。寺野東遺跡でも盛土の内側から堀立柱と思われる穴が見つかっています。縄文時代の土木工事と言われる古墳と比べられるが、古墳と違うところは数百年単位の行為の累積結果である点です。

なぜ千年も同じ作業を続けたのか。なぜ同じ場所に土を積み上げたのか。なぜ土器をゴミ捨て場に捨てずに盛土遺構に捨てたのか。なぜ土器が敷き詰めたような形で大量に出土するのか。なぜ住居に隣接しているのか。これらの説明として

A　立穴住居や大きな柱穴を作った時の残土や廃排土と一緒に土器も捨てられた、それらの作業が繰り返されて小山のようになった。

B　共同作業場である。

C　広場、祭祀場である。

どの説も当たっているような当たっていないような今一つの物足りなさを感じます。それは遺跡全体の中の一つの空間という認識に欠けているからではないでしょうか。

4 堀立柱建造物

根元を地面に掘った穴に埋め込むようにして立てた柱をもとに地上に何らかの建築物を作り、高床ないしは地面を床とした建造物が縄文時代のどの集落にもあります。使用目的ははっきりしませんが住居ではないらしい建物です。今これを三種類に分けて考察してみます。

A　巨大木柱建造物　直径1メートル内外の木柱が6本あったと思われ10～20メートルの高さを持つ建造物があったと推定されています。灯台説、祭祀場説、目印説、倉庫説とありますが、これは海に面しておらず沖館川に2、3百メートル入り込んだ所にあります。現在は洪水の時の水の調整地とされていますが、当時の地理はよく分からないものの、位置からいうと入り江として活用され船付き場として最適な位置にあります。そうすると船付き場としての目印あるいは船の出入りの指令塔のようなものが考えられ、外来者の交易や荷物の揚げ降ろしの場所だったのではないでしょうか。

B　大型居住跡　数軒あり。大きいものでは短軸10メートル長軸30メートルのものもあり、床面のほぼ中央に炉跡があります。交易品、貴重品等の保管庫または首長の住居、冬に共同で住み込むとか作業場とか言われているがはっきりしません。

C　方形柱穴列　ロングハウスと言われる細長い建物が想定されています。横4ないし6メートル縦は20メートルを超えるものもあります。炉の跡がなく倉庫とみなされるくらいで使途不明建造物です。普遍的にどの遺跡でも見られるものです。したがって縄文時代の人々にはごく普通に見られる行為と関係あるはずです。本稿の目的はこの建造物です。

5 点セット

これらの事象を整合的に説明すると次のようになるのではないでしょうか。

東側の採掘穴から粘土を採取し、大型住居跡またはロングハウスでこねあげ乾燥させる。そして盛土で野焼きをする。最初は野焼きをする場所の土を焼いた程度で野焼きをしていたので、焼き方が十分でなかった、したがって完成間際に壊れたり、使い物にならない土器もあったことでしょう。だがその後しだいに下に片付けられないままの土器があったりすることにより、火の通りがよいことに気付いて意識的に使用済みの土器を小片にして敷くようになった。野焼や土器製造の技術が飛躍的に進歩した時期には大量の土器が生産されたことでしょう。それが縄文前期と中期の境目と思われます。焼上がるまでの一昼夜は周りを人々が取り囲んで見守る。そういう火の輪は一か所とは限らない。専門職として交易品や素人には作れないものを手掛ける火の輪、素人がほんの日用品として作る火の輪などを取り囲んで人々は上手にできるようにと祈ったことでしょう。あるいはすぐれたものを交換しようとする話し合いに歌や踊や酒が付いたことでしょう。何年かに一度は土が盛られ整地され野焼きが続いたのでしょう。同じ集落の中でこのような営みがあったとすれば集落全体が有機的関連性をもって理解されるのではないでしょうか。

（市民古代史の会会員　青森市在住）

【訂正】
本紙前号（多元第5号）古田武彦氏講演要旨のうち、3ページ小見出し「他言無用」は「多見無用」に、4ページ上段12行目の「今年中に」は「今年以降に」に、第2段6行目「他言無用とせよ」は「他見無用とせよ」に、小見出しより3行目「古田クラブ」は「古田グラフ」に、6ページ上段最終行「邪馬"壹"国」を「邪馬"臺"国」にそれぞれ訂正いたします。

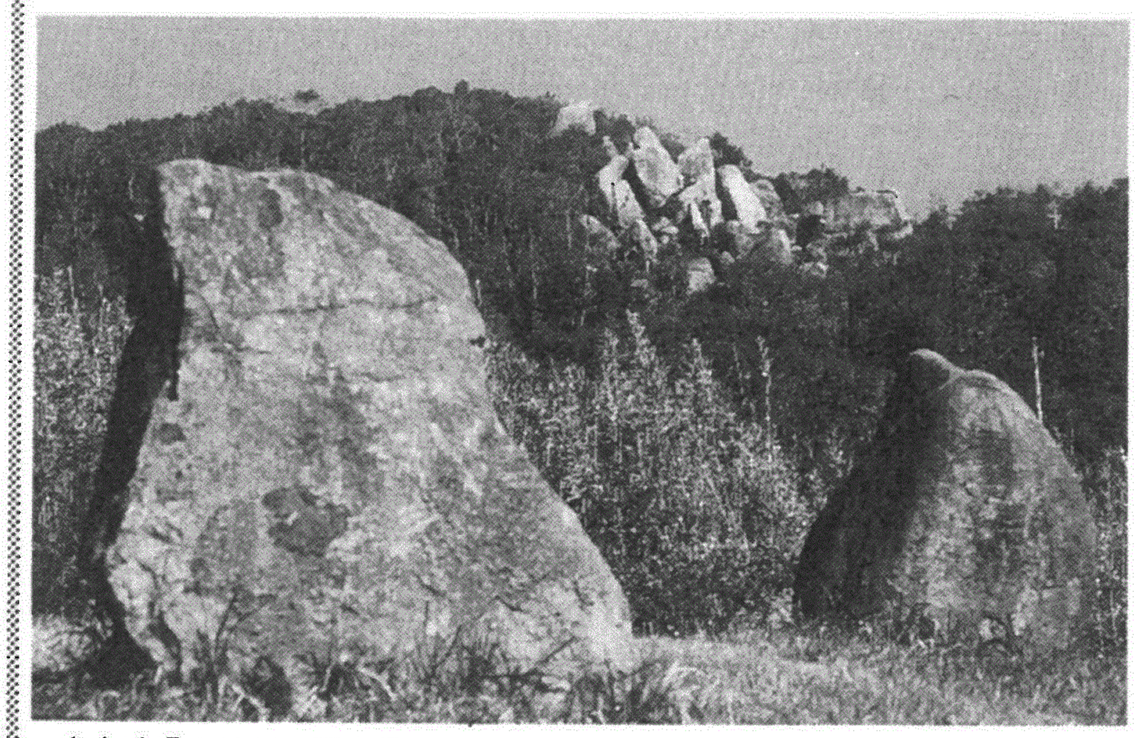
室戸汽船にて

古田　武彦

一

一人旅だった。真夜中の十二時二十分、室戸汽船は大坂の南港、フェリーポートを出発した。雨模様の昨日とは打って変った晴天、よい船旅となった。（三月十一日）

もう馴れ切った、といっていい、このコースだけれど、今回だけは出発地がいつもの東神戸ではなかった。あの埠頭は、阪神大震災の直撃で、使用不能となったのである。幸い、人的被害はなかった。その上、あの瞬間、この豪華船（とわたしには見える）「むろと」は海上にあった。時間からいうと、室戸岬を越えたところ、西へと方向を転じた頃であろう。（あとで、杉村三航士にお聞きすると、全く地震を感じず、連絡をうけて知った、とのこと。）



唐人駄場より唐人石を見る

二

今回の旅は、今までとはちがった感じ、いわば"軽快"な心境だった。足摺岬の臼碆（うすばえ）、そこは南方から北上した黒潮が日本列島の一角、否、アジア大陸の一端にぶっつかるところ、ここから方角を一変し、東の方に向う。その転回点、アジア大陸側から見た、黒潮の出発点に当る、この臼碆を中心に、一大巨石群がひろがり、「古代祭祀の場」の様相を見せていた。

わたしは一昨年（一九九三）二月二十八日、当地を訪れ、代表的な巨石群である唐人石やその前面（南の海側）に拡がる唐人駄場（駄場は切りひらかれた平地を指す言葉という。）を見て強烈な印象をうけた。「これは祭祀の場だ。」という印象をうけたのである。周辺の各巨石群を、土地の郷土史に関心をもつ方々に導かれて歴訪するうち、一層その感じは深められたのである。

しかし、「印象」は、あくまで印象にすぎず、学問ではない。学問的興味をそそる、研究の出発点にはなっても、いったんそれを"保留"し、客観的な検証へと向わねばならぬ。そこで選んだのが「鏡岩の実験」だった。足摺岬の黒潮沿いにそそり立つ巨石中、不思議にも、東または南、つまり黒潮に直面する側が「平面」になっているものがある。もちろん、これら全体がここへ"持ってこられた"とは考えられないけれど、大自然の摂理、すなわち岩の「節理」による「平面」が太陽の光に反射する、それが"利用"されたのではないか。このアイデアだ。

何のための「利用」か。それには二つある。第一は、太陽信仰の「祭りの場」として。黒潮上の舟から、その"輝く光"を遙拝したのである。第二は、灯台の役目。黒潮に乗じて北上してきた古代人の舟は、漫然とすすめば、当然難船する。難所、臼碆に激突する。それを避けるためには、かなり前の地点（海上点）で、黒潮から"脱出"せねばならぬ。"脱出"できれば、もはや陸地は近い。眼前に土佐清水がある。美しい、清冽な清水が湧き出るところ、そこが「清水」という字（あざ）の由来となった。その地に上陸できるのだ。これらの「平面」を、古代人はみがき、石英質の岩面を、そのような役割を果すものと見なし、それに対してもこれを「神の賜物」とうけとめたのではなかったか。

その詳細は、すでに書いたのでくりかえさないけれど、その年の「古代実験」は大成功だった。舟が臼碆の前方に来たとき、凹形になった山形のくぼみから、唐人石の鏡岩を中心に"貼付け"られた銀紙（レフ）がキラキラと輝いているのを見た感動が忘れられない。予想もせぬ「実験の成果」だった。（『古代史をゆるがす』原書房刊、参照）

三

今年も、赤外線写真撮影、飛行船からの空中撮影などを行った。多大の収穫をえた。そして今回の岩石学上の調査。それらの報告をまとめること、それが来年度（平成七年度）の仕事である。そしてその途次（今年の十一月下旬）には、わたしの「アメリカの姉」なるエバンス夫人の姿がこの足摺岬を訪れる。わたしは心躍りつつ、土佐清水を目指した。

山田宗睦 日本書紀講座 第八・九回

神は細部に宿り給う

第五段には十一の一書が連なる。いずれもイザナキ、イザナミの子作りに関する異伝、別史料である。そのうち、第二、三、四の一書について二回に分けて聞く。「神は細部に宿り給う」の言葉を引用され、細部こそ重要、小さな違いを軽視してはいけない、と強調されたが、その言葉通りの話が続く。

第二の一書はイザナキ、イザナミが六人の子供を作った話を伝える。六人説を説くのはこの一書だけである。六人とはヒルメ、ツクヨミ、ヒルコ、スサノオ、トリノイワクスフネ、カグツチである。ヒルメ、ツクヨミは日、月と表記され、ヒルコは三番目の子供として書かれ、国生み段階に書かれている本文や他の一書とは異なっている。ヒルコはつねにできそこない、その結果流されるという話になっている。スサノオが泣いてばかりいるのと好一対である。

ヒルコがこういう扱いを受けるのは陰陽の原理に違っているからだとされるが、スサノオが泣くため国民が多数死んだという話と同様、後世的説明である。

クスフネとあるが、テキストの注釈にいうクス（樟）の木かどうか不明で、タブではないかという仮説を持っている。火の神カグツチを生んだため、イザナミは焼かれ死ぬが、この流れの中から土神、水神、食物神が誕生する。カグツチは同母の兄妹婚をしたと読め、宣長あたりは困惑しているが、タブーの歴史からすると、この話の古さを傍証するものである。

史料間の表記の違いを集約、整理し、多くのことを解読した画期的な論稿として北川和秀「古事記上巻と日本書紀神代巻との関係」を紹介された。

第三の一書のカギはムスヒとアマノヨサツラである。イザナミが火神を生んだため焼かれ死んだ話で、火神ホムスヒはカグツチより新しい表現である。ヨサツラは大家がいろいろなことを言っているが、クズ（葛）と解する。ここで壮大な照葉樹林文化の話へ展開する。中尾佐助氏が唱えた照葉樹林文化説は今や定説になりつつあるが、クズはその一環である。照葉樹林文化の三要素はでんぷん、水、桶であるそうだが、これが記紀、万葉などにワンセットで出てくるかどうか、調べてみようという話になった。

第四の一書はイザナミの排せつ物が皆、神様になる話で、身体語の古さを指摘された。カグツチは古く、金山彦は新しい。第五の一書は死んだイザナミは紀伊の熊野の有馬村に葬られたといっている。また兵器のことをとり上げているが、地名の分かち書きといい、兵器のことといい、いずれも書紀の時代の新しい表記であり、書紀成立の時に挿入したのではないか。例の異なる時間のたたみ込みを確認するものである。

（木村由紀雄）

山田講座は五月より第二年度に入ります。二年度は一年八回（七月八月と十二月一月は休講）。新たに受講をお申込の方は通年会費八千円（会員外一万円）、一回参加費は千五百円とします。お申込みは事務局まで。

▼次回は4月9日（日）1時半より、東京都勤労福祉会館（地下鉄八丁堀）

▼5月は14日（日）1時半より、文京区民センター

青森への関心高まる 信州縄文の旅でのアンケート

昨年秋の信州縄文の旅に参加された方々に、今後の探訪旅行企画の参考のためにアンケートをお願いし、43名から回答をいただきました。

○行ってみたい所（複数回答）
- 九州（北）、対馬、壱岐 …10
- 青森（三内丸山 津軽）…10
- 関東六県 ……9
- 出雲、隠岐 ……6
- 信州 ……5
- その他越後、佐渡、東北、奈良、伊豆七島

○適当な日程は（複数回答）
- 日帰り ……15
- 一泊二日 ……33
- 二泊三日 ……12
- それ以上も可 ……8

○都合のよい日は（複数回答）
- 土、日、祝日に限る ……18
- 平日でもよい ……29

○費用はいくらまで
- 三万円以下 ……17
- 三～五万円 ……9
- 五～十万円 ……6
- 十万円以上も可 ……2
- 記入なし ……9

○日帰りで、小グループの旅を希望されますか
- はい ……33
- いいえ ……5
- 記入なし ……5

○今回の旅行について
- よかった ……36
- まあまあ ……6

ご協力ありがとうございました。

弓神事の原初的意味

三月の発表と懇談の会より

三月五日、民俗学研究家萩原法子氏より、表題のお話を伺った。萩原氏は長年、各地の弓神事（オビシャ）を一つ一つ尋ね歩かれ、研究を深めてこられた。その成果を、多数のスライドを交えながら話され、たいへん楽しい会になった。

オビシャとは各地で年頭に行われる行事で、オビシャ、百手祭、お的、弓祈祷などと呼ばれる神事である。

それは弓で的を射て、その年の善悪を占う年占であると解釈する柳田国男の説が定説化されている。それに対して萩原氏は、多くのオビシャを尋ね歩き、その研究の積み重ねの中から弓神事の原初の姿を探り出されておられる。

まず的に矢が当たるか否かではなく、的は必ず射破るものであること。また的に三本足の烏と兎が描かれる例が多いこと（茨城県稲敷郡江戸崎町時崎地区を始め茨城、千葉に多い）。

さらに三本足の烏と兎は、太陽と月を象徴したものであり、中国では前漢時代に太陽・月として烏と兎（ヒキガエル）が現われる。日本でも延喜式に「三足烏、日精也。白兎、月精也。」とある。また朝廷での元旦朝賀や即位式に三本足の烏と兎、カエルが描かれた日像幢、月像幢が用いられた。光格天皇（一七七九～一八一六）即位図を見ると、紫辰殿前庭中央に、正面向きに羽根を広げた三本足の烏が飾られた銅烏幢、その左右に日像幢、月像幢、それぞれの左右に朱雀、青龍、白虎、玄武と四神旗が立てられている。また法隆寺の玉虫厨子台座絵にも三本足の烏と兎、カエルがいる太陽・月が描かれており、仏教美術にも三本足の烏と兎は現われる。さらに隠岐島の日月陰陽和合祭に用いられる日天像・月天像、あるいは出雲美保神社の国譲り神話に由来する青柴垣神事の日像・月像にも三本足の烏と兎は登場する。これらの事例はオビシャの的に三本足の烏と兎が描かれる、的が太陽であることを証明する。

それでは三本足の烏（太陽）を射る意味は何か。それは中国の射日神話につながる。九つの太陽を射落とす話だ。この伝承が日本にもあることを氏は探り出されている。伊勢湾の神島で元旦の暁に行われるゲーター祭は、太陽の死と復活をテーマとする祭であるという。また福島県田村郡滝根町広瀬の宇佐八幡神社には射日神話を物語る文書と絵図が伝来しており神事も行われていることを氏は探し出されている。

実は中国での射日神話には後段として招日神話がセットであり、これが日本では天岩戸神話として独立している。つまり射日神話と招日神話が意味するものは太陽の死と復活＝時間の秩序の更新であり、ビシャとは、日射の意であろう。

オビシャの目的は太陽を新年に新生することで村の時間の秩序を更新し、豊作を祈ることである、とお話を結ばれた。

なお、お話の詳細は萩原法子氏の論文「弓神事の原初的意味を探る――三本足の烏の的を中心に」（『日本民俗学』日本民俗学会会報一九三号）をご参照ください。（富永長三）

オビシャと万葉集

富永長三

三月定例会で、萩原法子氏の弓神事――オビシャのお話を伺った。そのお話をベースにして読み解けると思える万葉歌がある。ご紹介しよう。

巻一六、三八五六番の歌、

「波羅門の　作れる小田を喫む烏　瞼腫れて　幡幢に居り」

この歌は従来「波羅門僧正の作る田の稲を食い荒らす烏は、その罰で瞼が腫れて幡幢にとまって居る」等々解釈されてきた。しかしこの解釈では、なぜ仏罰を受けた烏が幡幢にとまっているのか説明がつかない。必然性がないのだ。幡幢に居り、とは幡幢にとまっているのではなく、幡幢の中に居る。幡幢に描かれた烏、太陽の中にいる烏なのではないか。日像幢の烏、日天像の烏なのではないのか。幡幢に描かれた烏＝幡幢に閉じ込められた烏が、何故そこにいるのか、その問に一つの答えを出した歌、あるいはそれを揶揄した歌なのではないだろうか。

この歌の作者は、三八五五番の歌の前に「高宮王　詠数種物歌二首」とある。高宮王は伝未詳とされている。いまだ二首の歌の詳解には至っていないが、幡幢に居り、の新解はやがてそこに導いてくれるだろう。

万葉集は古代の歌集である。古代に生きた人々の心をもって読まねばなるまい。今、滅びようとしている弓神事――オビシャ、その説き明かされた原初の姿をもって、万葉歌を読み解く方法はあながち無謀とは言えないのではないか。

たろんサロン

多摩時論

「アラハバキ」を探す

小金井市　鴨下武之

◇小野神社へ行く

「新編武蔵風土記稿」によると、荒川・入間川流域の、足立・入間郡に合わせて二十社を超える「アラハバキ」があるのに、多摩川流域には一社しかないことに不審をもっていたが、高田会長から多摩市の小野神社にあると聞き、早速出かけた。

小野神社は、式内社で武蔵一之宮とされている由緒ある神社である。

神主に尋ねると「氏子代表に聞け」と言われ、太田伊三郎氏を訪ねると、郷土史家で多摩市誌編集委員の佐伯弘次氏のお宅に連れて行かれた。

小野神社の「アラハバキ」は随身門の中にある「随身像」のことで、見せられた太田家文書には、「昭和四九年解体修理の結果、阿吽の二像のうち阿像胴体の背中の裏面に『元応元年未丁十月廿九日因幡法橋応円』の墨書銘があった」とある。

元応元年は一三一九年、また、新編武蔵風土記稿にある「随身の像は仏師運慶が作なりと云」に当たる。

現在は都指定文化財となって、コンクリートの収納庫に入っていて見られないが、かわりに修理した彫刻家の作品が随身門に納まっている。

◇「阿良波婆伎名義考」

氏は「アラハバキ」が「随身」のことである根拠として、『猿渡盛章の「阿良波婆伎名義考」について』という論文を紹介してくれた。

著者は比留間一郎氏で多摩市文化財専門委員をされている。

「阿良波婆伎名義考」は武蔵国総社、現在の府中市大国魂神社の宮司であった猿渡容盛が嘉永四年（一八五一）に書いたもので、内容は次の四点に要約される。

1　武蔵国総社には慶長年間の造営まで、参道に三か所、左右、おのおの向き合って「阿良波婆伎」が祭られていたが、祭神は詳かでない。正保の火事で焼けて、全て廃社になり、再建されていない。

2　出雲の佐陀ノ神社の図に「アラハバキ門」があり、また、武蔵足立郡の氷川神社に荒波々幾ノ社があって、手摩乳、足摩乳を祭ると書物には書かれているが、阿良波婆伎という名前はどこから来たのか考え付かない。

門を守る神のように思われるので、仁王像などのような佛教の影響を受けたものかとも考えている。

3　甲斐国吉田の浅間神社にも随神門があり、神像の袴の形が異常で、脛巾のようなものを着ていた。

尋ねると、この像は古くから「アラハバキ」と言い、御門を守る神人だと言う。

4　そこで、「アラハバキ」とは、彼が着ている脛巾から来た名前で、朝廷の御門の衛士が脛巾を着ていることから起ったものであり、アラは荒栲（アラタエ）などのアラであると気がつき、年来の疑問が一時に解けた。

◇民俗学のアラハバキ

「日本民俗学辞典（名著普及会）」で、アラハバキカミを引くと、凡そ次のように出ている。

門客神の異称である。大宮市にある氷川神社の摂社に門客人社があり、祭神は豊磐窓・櫛磐窓の両神となっているが、古くは荒脛布神社と称したのを、神職が今の名に改め、足摩・手摩の二神を配祀した。

これは氷川社の祭神が須佐之男命と改定されたので、祭神に縁ある足手二神を追祀したものと考える。

この神は、関東から東北に多く祭られているが、これは始めに祭られた地主神が、後に祀られた神のために総てを奪われ、客神という名のもとに、社殿の奥から門前の方へ敬遠され、門客神と称されるようになったものである。

そこで役割は門に由緒ある豊・櫛両磐窓神とされ、更に門神・随神のため荒脛巾（草製の脚半）を付けた木像などが作られて、そのイメージが定着して行ったと考える。

以上が、民俗学辞典の解説であるが、大宮市の氷川神社の神主は、関東や東北に小さい祠で残っている「アラハバキ」の効験は女性に子供を授かるとか、更に下の病気に良いとか、言われていると、話していた。この方が、生殖を願う古代人の信仰に近いように思える。

いずれにしても、民俗学辞典の見解は正しいと思うので、これからも古代民族神としての「アラハバキ」を追いかけて見る積もりである。

最近、川越市でアラハバキに関する面白い伝承がある神事を見ることが出来たのと、菅江真澄の文集の中にも、三河から津軽まで「アラハバキ」の存在が伺えるものがあるので、それらを含めて後日報告したい。

なお、比留間一郎氏の論文は「アラハバキ」に関して、次の四点の文書も紹介しているが、府中市立郷土

の森博物館資料室で閲覧出来る。

1.「新撰総社伝記」、2.「同考証」猿渡盛章・文政十一年（一八二八）3.「武蔵総社誌」　猿渡容盛・慶応四年（一八六八）4.「神祇志料附考」　栗田　寛・昭和二年（一九二七）

おたより・原稿をお待ちしています。
「多元」編集室／〒151渋谷区本町1・7・16・1102／青山富士夫方

見る・考える

茅野遺跡と耳飾り館

群馬県榛東村

富永長三

群馬県榛東村立耳飾り館は、世界で初めての耳飾り専門館である。館内は、現代・歴史・縄文の三つのコーナーに分かれ、縄文の耳飾りを中心に世界各地の耳飾りと資料が展示されている。その縄文の耳飾りは、近くの茅野遺跡で発掘されたものである。茅野遺跡とは縄文後期から晩期の村であった。泉を中心として晩期の住居跡五十軒以上と墓、その外側を後期の住居跡百軒以上が取り囲んでいた。住居は地中からの湿気を防ぐため床面を焼き、さらに保湿のため茅などで編んだ敷物が敷かれていた。遺物の中でも特に耳飾り六百点以上の出土量は全国屈指のものであった。茅野遺跡は、関東北部のみならず、縄文社会全体の文化・社会を考えるうえで重要なヒントを与えてくれる。

電話0274（54）1133

書物の森

『倭人の絹』弥生時代の織物文化

布目順郎・著　小学館・刊／二五〇〇円

編集室

八十一歳と高齢の著者が、自ら開発された科学的な方法により、長年探索されてきた、弥生時代の絹についての研究を、わかりやすく集大成されたのが本書である。弥生時代の絹については「次々と発掘される繊維製品を調べ、その前後、すなわち縄文時代と古墳時代の出土品と対比し、かつ古典をも参照し、考察することによって、次第にはっきりと見えてくるようになった」と言われる。その結果、「私には、女王の都する邪馬台国は、養蚕絹織りの観点に立つかぎり北部九州にあったとするほうが、理屈にあっているように思える。ただし、今後において、これまでに北部九州から出土した絹製品に匹敵する絹製品が大和地方の弥生遺跡から出土することがあればこの限りではないが、そのようなことはまずあり得ないであろう」

以上の推定に至るまでの探索のプロセスが本書のハイライトである。現在まで絹の出土した弥生遺跡は十四（三五種類出土）すべて北部九州であるが、そのうち弥生後期とされるものはわずか二例のみ。「後期になると減少する理由については、甕棺が使われなくなり棺内の絹も早く劣化崩壊してしまうからという見解もあるが、はたしてそうであろうか。これには何か別の理由がありそうな気がする」

と、著者は疑問を投げかけておられる。この疑問には、北部九州弥生遺跡の年代比定の再検討の形で、考古学界が答えなければならない課題ではなかろうか。

なお、著者のさらに詳細な研究記録は、「布目順郎著作集　繊維古代文化研究」全四巻（富山市北代3363-11　桂書房）として編集が進められている由である。

お知らせ

▽朝日カルチャーセンター　古田武彦「人間の歴史」講座が継続します。
▼4月4日より9月26日まで全10回。
▼受講料二五〇〇円
▼申込は電話03（3344）1941（代）

▽NHKラジオ第二「文化講演会」古田武彦
丹後文明と「青龍三年」銅鏡の謎
―邪馬壹国の原点
▼4月30日（日）午後9時～10時
▼再放送5月4日（木）午前11時～12時▼再々放送5月7日（日）午前9時30分～10時30分
右は、3月23日新宿野村講堂で行われた「新都心文化講演会」での講話です。

▽昭和薬科大学紀要第29号には、古田武彦氏の論文「宝剣額」研究序説―和田家文書の真憑性―が発表されていますが、この論文は、現在編集進行中の共同研究誌に収録の予定です。

▽当会と各友好団体の共同編集による研究誌は、次々と折り重なる新課題に対する論文が追加されたため、進行が予定より遅れましたが、漸く内容が揃い、五月中の発行を目指して最後のまとめに入っています。近日に各会を通じて詳報いたします。

ネットワーク情報

■古田史学の会・北海道

古田史学の会・北海道が発足し、この一月北海道ニュースが創刊されました。その創刊の言葉を紹介します。

北海道ニュース創刊にあたって

北海道世話人　吉森政博

古田史学の会・北海道は、平成六年六月に有志九名によって設立されました。当時古田武彦氏に対して「東日流外三郡誌」偽書説を始めとして様々な批判がかつての支持者の中からまきおこっていました。それが論理的で的を得たものならば、古田史学の発展のためにも喜ばしいことだったのですが、どう客観的に見ても論理が粗雑でせいぜい古田説にも間違いがあり得るといった可能性を指摘する程度の内容としか思えない。しかもその程度の論証で、鬼の首をとったかのような調子で「これで古田説の誤りが立証された」としてあたかも古田説全体が誤りであるかのような雰囲気を醸し出す、まさに為にする批判だったわけです。さらにそれにたいする批判には「古田説を批判することを許さない古田盲信者」と決めつける。なんともやりきれない状況が続いていました。

私達は古田説すべてが正しいという立場はとりません。

しかし現在でも数ある学説のなかで最も妥当な、歴史の真実を解明するうえで最も近い位置にある学説と思っています。特に、三国志の分析から得られた「魏晋朝短里」という概念と近畿天皇家に先在する「九州王朝」の存在を無視しては古代史の解明は不可能とさえ思われます。

しかるに、現代の古代史学会の状況といえば、あたかも「古田説」はなかったかのように「定説」が今なお堂々と論証なきままに、まかり通っているのが現実です。新しい発掘があるたび流されるマスコミの論調も、天皇家一元主義に縛られた「定説」の枠の中にとどまっています。

私達は、古田氏の著作に出会うまで、古代について思いをはせる時、それがはるか幽遠の彼方、深い霧の彼方にあるもののような思いにとらわれていました。今思うと、それは古代を造作された神話として捨て去り、それぞれの学者が自己の学説に都合のよい所のみを史実として取捨選択し、それぞれがそれぞれの古代像を勝手に作り上げてきた「定説派学者」達によって生み出された幻想であったようです。

それが古田氏の論理的・科学的な論証から浮かびあがってきた多元的古代像に出会った時、古代はまさに現代につながる歴史として、まざまざと私達の目の前にはっきりと映り出したのです。古代人の息づかいが、今こうして生きている現代人と変わらぬ同じ人間としての温もりをもって伝わってくるのです。何百世代もの私達の祖先それぞれが、人間の生き様として歴史を築きあげてきたこと、その重さを感じ、それを私達がどう受け継いでゆくのか、それこそが私達が歴史を学ぶ、歴史に学ぶ本当の意味なのではないでしょうか。定説派のように古代人をあなどり、自己の学説の辻妻の合わなさを「どうせ古代人は…」と古代人を「無知、ウソつき」よばわりして補ってきたような歴史観からは決して真実の姿は見えてこないだろうと思います。

私たちは、古田武彦氏の「古代人をむやみに侮らない」「古文献の原文を自分の都合や後代の賢しらで改変しない」「誰でもがもつ納得する心を大事にする」「論証に使った資料を明示し誰もが追試できる論証であること」といった、分かり易く正当な方法によって論理的に導かれた「多元的史観」によって、今までどうしても解明が困難と思われていたことが、次々と無理なくつながっていくことを知ることができました。

私達はこのような「古田史学」の存在を一人でも多くの人に伝え、共にその継承・発展を目指していきたいと考えています。

＊力強い仲間を得たことを喜びます。

■「多元的古代」研究会・九州

1. 『対馬の旅』を行います。

▼日程　5月12～14日／往路　福岡空港7時50分発／宿泊12日厳原、13日比田勝▼見学地12日上見坂・小茂田神社・豆酸・同灯台・厳原市内13日和田都美神社・海神神社・韓国展望台他　14日鰐浦・塔の首古墳・小船越・梅林寺・阿麻氏留神社他・福岡空港17時20分着▼会費6万円／定員40名／お申し込みは電話092（811）3284灰塚照明氏まで。関東の会員も参加できます。

2. 荒金卓也著「九州古代史の謎」が発刊されました。定価1800円ですが、2割引で関東の会でも取次販売の予定。

【おことわり】これまで多元の会・関東の会員には、九州ニュースをもれなく郵送していましたが、関東の会報増ページに伴い、郵送料が倍増（190円）するため郵送できなくなりました。残念ですが、会合の時などにお渡しします。

事務局便り

◎一九九五年度会費納入のお願い

四月から新会計年度になります。会費四〇〇〇円未納の方には、振替用紙を同封いたしましたのでご利用ください。行き違いの節はご容赦ください。

◎入会を歓迎します

「古田武彦氏の提唱された、多元的に歴史を観る考え方に賛同し、それを継承発展させることを理念として、日本の古代の真実の姿を研究」する会として、発足以来五月で一年を迎えます。楽しい会であることを目指しています。新規ご入会を歓迎します。

▼入会金一〇〇〇円、年会費四〇〇〇円
▼住所氏名（ふりがな）電話番号を明記の上、左記へお振り込みください。
▼（郵便振替）口座名「多元的古代」研究会・関東
▼口座番号00170・9・768777

伝言板

1 関東史跡散歩の会

かねてより、多数の会員からご希望のあった日帰り見学会を実施いたします。

▼横浜市立歴史博物館「弥生の『いくさ』と環濠集落――大塚・歳勝土遺跡の時代」
▼4月29日（土）午前11時
▼集合場所　博物館入口ロビー
▼横浜市営地下鉄・センター駅下車。（案内図あり）渋谷からは田園都市線あざみ野駅で乗換
▼連絡先／富永長三
電話03（3308）1971

2 古事記を読む会

▼4月16日（日）1時～4時半
▼文京区民センター
▼参加費300円　原則として第三日曜日に開きます。参加希望の方は、原文所載の「古事記」をご持参ください。「真福寺本古事記」のプリントをこちらで準備します（実費）。
▼連絡先／西江雄児
電話FAX048（625）6651

定例会のご案内

1 万葉集と漢文を読む会

▼4月23日・5月28日　午後1時～5時
▼いずれも文京区民センター

恋しけば　来ませわが背子　垣つ柳
末摘みからし　われ立ち待たむ

この歌、前号で「垣つ」をどう理解するかによって別の顔を見せると書いたがその続き。次の歌を、恋しけばの歌の前に置いたらどうでしょうか。（拙作です。）

うつせみを　隔てし垣の　高やなぎ
恋にし妹を　夢にのみ見む

つまり社会的に超えられない垣、あるいは生と死の垣根、その垣の中に入ってしまった妹、それゆえ会うことの出来なくなってしまった背、両者の関係が見えてくるとは思いませんか。

稲つけば　かかる吾が手を
今宵もか
殿の若子が　取りて嘆かむ

先月はこの歌からでした。この歌、歌われた場面はどのようであったでしょうか。この歌の解釈は東歌全体の理解にも関係する歌のようです。なかなか結論は出ませんが、時間をかけて考えてみたい歌です。

「梁書」は高句驪伝を読み終わりました。三国志以後の各史書の間の出入り、歴代高句驪王の「三国史記」とのずれ等、一表にまとめるとわかりやすそうです。次回あたり、どなたかまとめる方向のようです。

なお、この会は初めの30分ぐらいは、発掘ニュース、新刊本情報、博物館見学報告、古田武彦氏の予定など、ニュースの交換もあります。ぜひのぞいてみてください。（富永長三）

2 懇談と発表の会

▼5月7日（日）午後1時～5時
▼文京区民センター
話題提供・安藤哲朗氏　【漢書五行志と地理志について】漢代に確立した五行思想が、漢書地理志ひいては倭人に関する記述にどのように影響したか……安藤氏の研究です。（六月は定期大会のためお休みです。）

●当会へのご連絡は、会長／高田かつ子TEL048（881）9111　事務局／下山昌孝TEL044（522）4185まで

編集室

◆地下鉄サリン事件の翌々日築地の新聞社に所用があって日比谷線に乗る。電車はいつもと変らぬ混雑、乗客はいつもと変らぬ無表情である。怖がってみたところでこの電車に乗るのを避けるわけにはいかない。それが生活の軌道であってみれば少なくともうわべは普通の顔をして乗るより仕方があるまい。それが都市住民の宿命であろう……。◆などと考えているうちに日頃愛読する永井荷風日記「断腸亭日乗」昭和十一年二月二六日の項を思い出した。その翌二七日、荷風は麻生の自邸から「午後市中の光景を見むと門を出づ」「溜池より虎の門のあたり弥次馬続々とし歩行す。海軍省及裁判所警視庁等皆門を閉ぢ兵卒これを守れり」「電車自動車通行自由なり。三越にて惣菜を購ひ茶店久辺留に至る。居合わす人々のはなしにて岡田斉藤の虐殺せられし光景の大略及暴動軍人の動静を知りえたり」それから旧知の人と、談笑、晩餐をとったのち「八時過外に出るに銀座通の夜店遊歩の人出いよいよ賑なり。顔なじみの街娼一両人に逢ふ」「虎の門あたりの商店平日は夜十時前に戸を閉すに今宵は人出賑なるため皆燈火を点じたれば金比羅の縁日の如し」「無事に家に帰れば十一時なり。この日新聞紙には暴動の記事なし」以上かなり楽天的な東京市民の表情がうかがえる。◆がしかし、この日を峠に国家はあの悲惨な大戦争へと転がり落ちて行くのである。古代の史料を読み解くことも難しいが、自分史の眼前に歴史の節目を占うこともまた難しいかなである。（匙）